数式処理 *J.JSSAC (2004)*
Vol. 10, No. 3, pp. 1 - 2

巻頭言

今を生きる

横山　和弘

九州大学大学院数理学研究院

最近、構造改革という言葉があちこちで叫ばれて、大学でも２１世紀 COE プログラムやら産学連携やら競争的資金の獲得等、さらには、平成１６年４月には、国立大学の独立法人化が行われ、まさに、激動の時代を迎えたようである。私は、つい３年程前に民間企業から国立大学に移り、公務員になってしまったと思った矢先に、また民間人に逆戻りとなってしまった。現在の所属は、数理学研究院といういかめしい名の部局で、基本的には数学者の集団である。産学連携の席で、現代数学が営利企業に直接役に立つかと問われても、どう答えるかは非常に難しい。数学と一口で言ってもいろいろな分野が複雑に入り組んでおり、役にたちそうな所もあれば、当然そうでない所もある。ジッパヒトカラゲに社会貢献をせよという風潮に将来に関する不安を募らせている人も多い。

多くの人達は、知的好奇心と美学をもって、研究に励んでいるようで、崇高なる真理を求める修行僧のようでもあり、他分野の者にはなにが楽しいのか理解に苦しむような難解な理論を楽しむ『おたく』でもあるように見える。どうすれば、このような純粋な心を持つ人々が自由に研究できる環境を維持することができるのであろうか？これは社会が許さないのであろうか？

私は企業からひょこっとやって来た者であるが故に、学内では、少しは世間を知っているように思われ、産学やら COE やらに駆り出されている。確かに、数学を離れ、民間企業にお世話になり、少しばかり他の世界を経験したのであるが、そこでは、いつも数学をどう役に立たせるか？(役に立つように思わせるか？) を考えさせられてきた。つねづね感じていたことは、

> 『真理は普遍なものである (はず) であるが、やっているのは人間であり、数学も生き物であろう。周りの環境に影響されながら、形を変えて進化？していくに違いない。数学の担い手は、現代社会の中から育つわけで、影響は、かなり深いレベルであろう。』(高度な論理をいとも簡単に駆使できるのに、会議では感情論にはしる人もいるという意味ではないことに注意)

である。やはり、私たちは、今に生きているんだなと思う。研究への動機は極めて人間的であるし、研究分野は激しく変貌している。数式処理でいえば、システムやらアルゴリズムは

© 2004 Japan Society for Symbolic and Algebraic Computation

日々良いものに置き換わり、記録は更新されている。すぐにも滅ぶ理論もあれば、新しい世界を開く理論もあれば、滅んだとも思ったら復活する理論もあろう。(芸能界に似ているかも知れない。) しかしながら、やっている本人には、やっている最中にそれが分かるはずもなく、次の世代、次の次の世代になってわかるのだろう。私たちは、ただ、知的好奇心と美学をもって、研究に励むしかないだろう。社会貢献に関しても同様で、未来に期待するしかないものもあれば、やっている最中に社会貢献できるものもある。(それはそれで、幸福の極みであろう。)

改革の嵐は、『たこつぼ』に籠りがちな研究者に外へと目を向けさせる効果があるが、好奇心や美学を奪っては効果を期待できないであろう。